『源氏物語』の「琵琶」

野村充利

「光源氏は琵琶を弾かない。」

私が、この修士論文において、このテーマを選んだのは、『源氏物語』において、他の楽器においては最も演奏回数の多い光源氏が、物語中三十九例見られる「琵琶」を何故一度も演奏しなかったのかについて疑問に思ったからである。そのことを明らかにするために『源氏物語』において「琵琶」を演奏する者は、どんな者たちなのであるのか、またそれらの者に何かの共通点はあるのかということについて本文を考察し、それらの者と光源氏とを比較してみたい。さらに、「琵琶」という楽器が当時日本において、どのような価値観を以て人々に受け入れられていたのかも考えていきたい。そして、これらを考えるにあたっては、中国における「琵琶」というものを手がかりとしたい。そしてさらに、『源氏物語』以前、以後の物語についての「琵琶」の描かれ方についても検証し、『源氏物語』も含め、平安期の物語文学において、「琵琶」という楽器がどのように当時の人々に受容されていたのかについて論じていきたい。

まず、日本の「琵琶」に先立ち、中国における「琵琶」の受容を考えてみる。後漢の時代の書、『風俗通義』には「琴」に関しては、「琴者樂之統也與八音並行然君子所常御者琴最親密不離於身」という記述が見られる。一方、「琵琶」に

関して言えば、「謹按此近世樂家所作不知誰也手枇杷因以爲名長三尺五寸法天地人與五行四絃象四時」とあるだけであり、「琴」などは当時よりかなり重んじられた楽器であったのに対し、「琵琶」はまだ新しい楽器にとどまり、さほど重要視される楽器ではなかったということが伺えるのである。唐代の詩人に目を向けても、王翰に一つ、孟浩然にも一つ、王維や李白には全く見られず、杜甫においても王昭君を歌った詩一つのみである。このような中で、初めて「琵琶」と人間が深く直接的に関わっている事を詩にしたのが、白楽天の「琵琶行」であった。

では、日本に目を向けるとどうであろうか。日本にいつごろ「琵琶」が入ってきたかは定かではないが、正倉院御物に「世界で唯一現存している五弦琵琶」である「螺鈿紫檀五絃琵琶」を始めいくつかの琵琶が残っていることからも奈良時代すでに、日本に「琵琶」があったことがわかる。さらに当時の「令」の記述の中にも雅楽寮において、「琵琶」が演奏されていたことがわかる。しかし『古事記』、『日本書紀』などでは、すでに同じ弦楽器である「琴」（ここでは「和琴」）が、人間を超越する力を持つ重要なものとして描かれている。またこれも同じく弦楽器の一つである『泰箏相承血脈』に見られる「箏の琴」の伝承には、仁明・文徳・清和・醍醐天皇などの名が見られるのに対し、「琵琶」の伝承を記録した『琵琶血脈』には、天皇の名はほとんど見られない。（天皇に関係するのは後高倉院のみである。）相馬万里子氏は論文「『代々琵琶秘曲御伝授事』とその前後―持明院統天皇の琵琶―」の中で、「琵琶」が、盛んに演奏されるのは、藤原師長が登場する平安後期頃からだと述べられ、天皇が「琵琶」の秘曲を初めて伝授されたのは後鳥羽上皇であり、「帝王学」として「琵琶」がその地位を築くのは、後深草天皇以後のことだとされている。

平安初期、「琵琶」が中国のそれと同じく、未だその確固たる地位を築いていなかったことは、他に『日本三代実録』の藤原貞敏の薨卒伝記や、『禁秘抄』、『文机談』からの記述からも伺い知ることができる。

源氏以前の物語である『宇津保物語』においての「琵琶」は、『源氏物語』よりも「琵琶」の用例は多いながらも、そのほとんどが他の楽器との合奏の場面で、他の楽器に合わせて弾くという程度の扱われ方しかしていない。『落窪物語』にいたっては、「横笛」や「箏の琴」が重要な楽器として描かれるが、「琵琶」についての記述は全く見られない。ちなみに『竹取物語』にもは「琵琶」の用例は全く見られない。

しかし、逆に『源氏物語』以後の物語文学に目を向けると、その状況は一変する。

『浜松中納言物語』になると、「琵琶」は主人公の中納言が弾く楽器として登場する。そして日本に戻った後も中国に滞在していたときに聞いた、五の君の「琵琶」が忘れられず、中納言が「琵琶」の音を聞いたときには、あわせて中国にいた頃全体を思い出すという形で「琵琶」が描かれる。さらに人に何かを伝えたいとき、「琵琶」の音色をもって相手に自らの気持ちを伝えるという場面も何例か見られる。

もう一つ『堤中納言物語』では、「琴」の用例一つに対して、「琵琶」の用例は二つあるのであるが、この二例とも「琵琶」がまず演奏をし、続いて他の楽器がそれに合わせて加わっていくといった形になっている。つまり、『源氏物語』の以前以後では、「琵琶」の物語における位置に多少ならぬ差異が認められるのである。では、その中間に位置する『源氏物語』における「琵琶」の描かれ方はどうであろうか。そこには「光源氏は琵琶を弾かない」ということに関する答えはあるのであろうか。

『源氏物語』の「琵琶」の描かれ方の特性は大きく分けて二つある。まず一つは、「琵琶」が合奏の中で用いられる場合である。楽器を誰が担当したか明確な場合の例を、それぞれの楽器とその担当者を照らし合わせると、次のようになる。[　　]は巻名である。

末摘花

笛……光源氏・頭中将
高麗笛……左大臣
琴……葵の上づきの女房たち
琵琶……中務の君

絵合

和琴……権中納言
箏の琴……師宮
琴……光源氏
琵琶……少将の命婦

梅枝

箏の琴……光源氏
和琴……頭中将
横笛……宰相の中将
琵琶……兵部卿の宮
謡……弁少将

若菜上

琴……院（光源氏）

和琴……太政大臣
琵琶……兵部卿の宮

竹河

和琴……冷泉院
箏の琴……玉鬘の娘
琵琶……薫

手習

琴……尼君
琵琶……少将の尼君

こう見てくると、明らかに光源氏のみならず、院や頭中将など社会地位が高い人物が、「琴」や「和琴」などを差し置いて「琵琶」を弾くことはないということが言える。ただし注意しなければならないのは、「琵琶」は身分の低い者のみが弾く楽器であるといったことでは決してない。弦楽器なら弦楽器の中で、優先順位というものがあり、その場にいる者によって自然と上から楽器の担当が決まっていくということなのであろう。現に「光源氏は琵琶を弾けない者」ではないことは、「絵合」の巻の源氏の弟君である師宮の言葉からも明らかである。

この事は、前述した「琵琶」の楽器の時代性が物語世界に見事に反映されていると言えよう。それは山田孝雄氏が『源氏物語の音楽』において述べられた『源氏物語』の音楽世界は、一条朝の頃のものではなく、平安初期の延喜・

天暦の頃の「時代物」である、といったことにもつながっていくのである。光源氏は「琵琶」を弾く心得があっても敢えて琵琶を弾く必要がないのである。

もう一つの『源氏物語』における「琵琶」特性は、「明石一族」と「宇治八の宮家」の弾く「琵琶」である。それは言い換えれば、都より凋落した家が、都より離れた土地にて伝えている「琵琶」ということである。さらに言葉を補えば、『源氏物語』における物語世界を形成する上で、その人物造形に深く関わる、いわばその人個人の存在証明としての「琵琶」なのである。

「ひが者」と言われた父明石入道の一族再興の願を受け、常にひかえめに「心おきて」を持ち続けながら、明石の君は娘の入内、そして春宮出産という形で、一つの幸福を得ることが出来る。しかし最後まで明石の君自身が決して表に出ることはなかった。その中で「若菜下」の巻における六条院の女楽において、明石の君は「琵琶」を担当する。確かに立場から言えば、琴を担当する女三の宮、和琴を担当する紫の上、そして自分の娘でありながらも、帝の春宮を出産した明石の女御に劣るものの、楽器そのものの腕前は、「いづれとなきなかに」とされながら、明石の君の「琵琶」がまず最初に、「すぐれて上手めき」と評価され、さらにその撥さばきは「神さびたる手づかひ」とまで賞賛される。今まで他の楽器の陰に隠れていた楽器が、明石の君の力により一躍脚光を浴び、「琵琶」が一つの楽器として初めて物語の中心に語られた瞬間ではないだろうか。

この都から凋落した者が弾く「琵琶」というものは、白楽天の「琵琶行」が大きく影響していると考えられる。この詩は白楽天自身、罪を問われ一時都から離れていたときに、自分と同じような境遇の女性の弾く「琵琶」に惹かれ創作された。一方光源氏も権力闘争の中、都を離れた失意の中で、これも同じような境遇の明石一族の「琵琶」の調

べに惹かれたのである。そこで光源氏が、「琵琶を敢えて弾かない」ことは、紫式部が明石の君とその父入道の物語世界における人物造形の上で、「琵琶」を彼らの存在証明として重要視したためではなかろうか。